

ふくよかなチェロの響きがリナス・フアベル／ストラヴィヤリ・オマージュから流れてきた時、私は椅子から身を乗り出さずにはいられなかった。その旋律を耳だけでなく、五臓、否、自分のすべての感覚を研ぎ澄まして受け止めねばならないという衝動に駆られたからだ。

「エルガー…チェロ協奏曲／ナタリー・クライン」。  
クラインの指先から紡ぎ出されるそのメロディは、官能的でありながら、憂愁をたゞり含み、哀切にむせび泣くようで、胸に迫ってきた。

聴くばく、悲しく、それでいて眩しい煌めきを放つその再生音は、ストラヴィヤリ・オマージュだからこそその再現なのか。必ずしもそれだけではないことを、私は十分にわかっていた。

ストラヴィヤリ・オマージュが唯一無二の素晴らしいスピーカーであることはもちろん認識している。しかし、その名機からここまでスケール感豊かな響きを引き出しているのは、ソウリューションのセパレートアンプを抜きには話れない。

# 次に来たものに ベギタタるもの

On

ソウリューション

ソウリューションがもたらす  
エモーショナルな感嘆!

エルガーの子エロ協奏曲は、英国生まれのこの作曲家の代表曲で、ジャクリーヌ・デュ・プレ/ジョン・バルビローリ指揮の65年の演奏が今や伝説といってもいい定番中の定番。しかし、ここでのクライソの演奏は、最新録音ということも相まって、明晰かつ濃厚で、濃密な彩りをイメージさせる。第二楽章の駆け上がるようなメロディーラインは実にダイナミックだし、第三楽章では慈しむようなムードを醸し出しながらも、決して情緒的に流されない毅然とした力強さを感じる演奏だ。それでいて第四楽章は優しく包み込むようなある種の母性を思わせる。いま肩の部屋の空気が、音楽がもたらしてくれた慈愛で満ち溢れるようである。

私は再生音楽からこれほどの包容力を感じとったことはない。いまは口、目を瞑って音楽に身体を預ける心地よさを堪能している。心は昂ぶっているが、温かい充足感でゆっくりと満たされていくのがわかる。

理想的なムードと、たっぷりとした哀愁を含んだ部分とが巧みに織り込まれたこの楽曲を、ナタリー・クラインはひじょうに丁寧に、なおかつ表情豊かに演奏している。エルガーならではのゆるやかな緩急を深く彫り下げ、展開は実にドラマティックだ。

おそらくクラインは、自分の中に湧き出る感情の起伏を指先や腕だけでなく全身で表現しているのだと思うが、ソウリューションは伝送された電気信号というエレメントの中から、彼女の意志や



